

ロード

Bブロック 全作品と講評



www.columnland.net/

にて作者さん&読者さんの声実況中

グローバル化に際して
回文もグローバルに
やってみた

ロード **【road】**

ドーロ **【道路】**

分かれ道

笑いながら食事が出るのを待っていた

退屈する事なんて無くて、食事が出てくる事を疎ましく思った

時折言葉を交わしながら麺を啜る

とてもおいしくて、言葉より箸が進む

くだらない事を話して食べた後の一服をする

この時間を、少しでも引き延ばそうとした

帰り道に明日の話をしてさよならを交換する

残りの道を、電車で揺られてすごした

一人で待つ時間はかつてより長く感じられて

テレビと店の主人が料理を作る音だけが響いていた

早く来ないか、イライラと椅子を揺すった

一人で麺を啜る

こんなのつべりとした味だっただろうか

以前はもっと刺激的だったのに

一人で食べた後、とつと店を出る

店の主人は自分の事を覚えていた

卵はサービス、また来てね。畜生、冗談じゃない

一人で帰る道

次の授業が始まってしまふ

先ほどまでの事を頭から排除して小走りで駅に向かった

かつて同じ道を歩いた人たちと別れ

僕の世界は大きく変わった

B-3 騎士と吸血鬼

「あとはお前だけだ」

白髪の若い騎士は血に濡れた白銀の剣を突き付けて吸血鬼に告げる。両者の距離はおよそ10m、話す分にはちょうど良く、戦うには遠すぎる間合い。

「ふん、全くもって役立たずな使い魔だ。たかが人間程度仕留められんとはな。夜の支配者・ナイトロードを名乗る余の顔に泥を塗りおって」

「…行くぞ」

一息で9mもの間合いをつめ、雷鳴の速さをもって吸血鬼に斬りかかる。普通の人間なら反応もできず、そのまま胴から二つに切断されるだろう。だが相手は吸血鬼、その程度で殺せるのなら、ここまで大事にはならなかっただろう。剣が届く瞬間吸血鬼は霧になり、刹那騎士の背後に現れる。吸血鬼は虚を突かれた騎士の首筋にその牙を突き立てた。これでゲームオーバー、騎士は吸血鬼に血を吸われ従順な配下に成り下がるだろう、

そう彼がただの人間だったならば

「……?」

吸血鬼はもつと早く気付くべきであった、彼が普通の人間、いや人間ではないことに。

「貴様、まさかダンピールか!」

「気付くのが遅すぎるな。それでナイトロードを名乗ろうとは笑止千万」

ダンピールの血を吸い、動きの鈍った吸血鬼の首を刎ねることなど造作もない。その白銀の剣が吸血鬼の首と胴を切り離す。そしてとどめに懷から白木の杭を取り出し心臓へ突き刺した。

ダンピールとは吸血鬼と人間のハーフのことであり、その血には吸血鬼の血を抑える効果がある。人間側の血が吸血鬼側の血の効果を抑えるというダンピールの特性があるため、ダンピールの血を吸った吸血鬼は一時的にその吸血鬼としての高い能力を失い、人間と同じになってしまうのだ。対して、ダンピールは自らの意志で吸血

鬼としての力を解放することができる。そのためダンピール対吸血鬼の勝負はダンピールが圧倒的に優位であり、故にダンピールは最高の吸血鬼ハンターと呼ばれている。「ああ、哀れなダンピールめ。人に尽くしてやっても…いずれ殺されるだけだということが…わかつている…くせに」

「そんなことは百も承知だ。それでも俺は主に従う」

「本当に…報われ…ないな、ダンピール…よ」

既に吸血鬼としても人としても致命傷を負っている。

あとはただ死に行くのみだ。仕上げとして城に火をつける。これで何があってもあの吸血鬼は復活できない。燃え盛る城を背に彼は主の元への帰路についた。

ダンピールは優れているが、ひとつ問題がある。吸血鬼の血を抑える人の血が尽きた時、即ち人としての死を迎えた時、彼らは吸血鬼となってしまうということだ。故に彼らは人としての死を迎える前に生物としての死を迎えることになる。つまり対ダンピール用の処刑術式のつとり処刑されるのだ。人のために尽くし、そして最後には人の手で殺される。これは確定した未来。確かに報われないかもしれない。でも彼はそれでもよかった。今の主のためなら、そう生きて後悔はないとあの日誓ったから。



生まれた時から私は悪意の中にいた。皆が私のことを恐れ、悪意をぶつけた。私は抵抗しなかった。私が抵抗してしまえば母さんがもつとひどい目にあうと分かっていたから。私が17歳になる頃、母は死んだ。私には何もかもがどうでもよくなった。そんなときに主が現れた。主はこんな私を自分の騎士として、そして家族として扱ってくれた。主の仕事は異端の抹殺。主本人が異端でもあるからなのであろう。私は絶対に報われない、しかし誰よりも優しい主の力になりました。よかった。

「私のためにその人生を捧げる」

嬉しかった。私を求めてくれたことが本当に嬉しかった。だから私は最大限の敬意と感謝の気持ちをもってこれにこたえたいと思った。主の前で膝をついてかしずき、その言葉を口にする。

「イエス、マイロード」

青春ロード

この今にも崩れてしまいそうな程フワフワした
幸福感で、

それ故の浮遊感にも似た危うさが、

青春なのだといずれ思える時がいつかくるのだろうか。

歌舞伎町の雑居ビルよりも荒れ果てたこの深い

森を進み続けて、

ふと自分の登ってきた道を振り返って見下ろした時に、

この方向で正しかったと自身を持って言えるだろうか。

葦

宇宙の真理を一部その軀の内に秘めているような青年がいた。

彼は幼い頃からおよそ「神の見えざる手」なるものの介入する余地のある学問全てに頭角を現し、それらを感覚的に、疑いもせず吸収していった。「世界はそういう風にできている」という信念を持ち合わせていたからである。

青年とは反対に、無知であるが故に思考をする鴉がいた。青年は無知である人間を見下し生きてきて、次第に人々から敬遠されるようになっていったのだが、どういうわけかの人間と鴉はお互いを受け入れることができた。

今となつては、青年が住んでいる寮の窓際で歛談するのが彼等の日課である。

「オレは今日学んだ。ニンゲンが出したゴミは、栄養価は高いが、不味い」

「・・・そんなこと言う鴉はお前くらいだ」

この鳥を見る度に、思うことがある。彼は、神に最も近い存在と粹がつている人間共を興味の対象とすることを嫌っていた。だがこの鴉は無知で、宇宙の壮大な流れの一筋をも汲むことはできず、些細な存在なのだが、彼には尊い生き物の様に思えた。

鴉は思考する。彼はそこから多くを学ぶ。

「キミも少しは疑い深くなつた方がいい。ある意味キミは純粹すぎるから人間が苦手なんだ」

鴉曰く、彼は学問の王道ならぬ学問の神道を行っているらしい。彼自身が人間として学問にも生きることに主體的になることで、人間嫌いが克服できるであらうと鳥はいう。

「そのうち輪が広がっていけば、君をそのまま受け入れてくれるようなニンゲンも現れるかもしれないだろ」

しかし彼は人と関わり合うことに意義を感じられない。

「俺、地歴なんかの科目はともかく、言語学ばかりはどうも苦手なんだが。どんなに頑張っても良くて数学の四分の一しかテストで点とれないし」

「それ、MAX二十五点じゃないか・・・」

いや違う、一度は関わり合おうとした。しかし心が折れたのだつた。彼は、美しい宇宙の真理に人間も乗っていることを確かめたかつたのだが。

「なあ」

鴉は思考する。

「やつぱりさ、どんなに些細なことでも自分にとって本質的なことを問い続けなきゃいけないとオレは思うわけよ。それは、キミが救われるためにも」

今まで、見て見ぬふりをしていたところを突かれた。

このささやかな言葉が彼の行く道を照らす。背中を押される感覚がした。

ストロングウーマン

社運を賭けた一大プロジェクト。そのクライアントとの会合のため、私は車を走らせていた。今日は絶対に失敗はできない。昨日から何度も資料をチェックして、クリーニングからあがったばかりの一番いいスーツを着てきた。うん、大丈夫。そのはずだった。

山沿いの一本道に入り十分ほど走った頃、道路上に緑の点々がぼつぼつと現れた。あれは何だろう、草かな。そう思っただけ目を凝らそうとしたとき、緑の点がピョンと跳ねた。小さなアマガエル、そうかこの辺田んぼがあるから。気にせず車を走らせ九十度のカーブを曲がる。

思わず急ブレーキを踏んだ。何百というカエルが路面中を跳ね回っていた。茶色くて一回り大きいトノサマもいる。なにこれ、絶対おかしい。

だが引き返す事はできない。時間には相当余裕を持たせてあるが、この道を迂回するには山越えするしか無く、流石にそれだけの時間は無かった。

何度クラクションを鳴らしてもカエル達がどく気配は無い。仕方がない、私を恨むなよ。アクセルを踏み込んだ。小さいものを踏みつぶしていく感触がほんのかすかにペダルに伝わってくる。気持ち悪い。幼い頃はおてんばで、素手でカエルを掴んで笑っていたというのに。大人になるにつれ虫やカエルが怖くなっていた気がする。

先に進めば進むほどカエルの数は増えているような気がして、なるべく路面を見ないように、無心で運転を続けた。悪夢を見ているような感覚。

キュルルル。タイヤのスリッパ音に現実を引き戻され、はっと前を見た。から白線が消え、黒いでこぼこがぬめぬめと光っている。何が何だかよくわからない。思考は働かないが恐怖だけがじわじわと押し寄せてくる。

可愛らしいアマやトノサマなど既に影も形も無かった。膨大な数のウシガエルが道路を覆い尽くし、アスファルトが全く見えない状態だった。絶叫しつつそれでもなおアクセルを踏み込む。片手に収まらないほど大きいウシガエルを踏み、車体は上下に波打ち滑り狂ったような走り続ける。涙と鼻水で顔がぐちゃぐちゃになる。真由ちゃん、田中君、部長——同じ部署の仲間の顔が次々に浮かぶ。負けれない、負けてなるものか。

空からカエルが降り注ぎ、天井やフロントガラスにビチビチと叩き付けられていく。だがもう何が来ても驚かない。そう決めた。同エンジンが異音を上げて停止する。排気口が詰まったか肉片を巻き込んだか、いずれにせよすぐには動かない。カーナビを見る。最寄りの駅まであと三キロ。

腹を決めた。資料を抱え、深呼吸してからドアを蹴り破るように開き、カエルの雨の中を駆け出す。髪や腕にカエルがへばりつく。靴越しに肉の潰れる感触が伝わってくる。ぬめりに足を取られ転ぶ。胃から熱いものがこみ上げてくる。それでも負けない。絶対に負けない。

鳴き声とも雄叫びともつかぬ叫びをあげながら、私は走り続けた。

ピーポーピーポーピーポー

「30代男性 脈拍51心拍43

血圧：頭部に大きな損傷が…」

夜は緊張のあまりほとんど眠っていない…。眠気覚ましに外に出てみることにした。すると…

「健！」

通りの向こうにちょうどタクシーから降りてくる健がいた。

車の切れ目を狙って無邪気に手を振りながら通りを走ってくる…

「景子！ごめん遅くなっ…」

「危ない！！！」

「景子きれいだよ。なあ 母さん」

「ええ本当にきれい」

「ありがとう。お父さんお母さん」

私は結婚式場の控え室で父と母と向かい合っていた。

私の身を包むのは、真つ白なウェディングドレス…

今日、私は結婚する。大好きな、

あの人と…

「それにしても遅いわね…健さん。

景子さん連絡受けてるの？」

「ううん。きっと仕事がギリギリ

まで終わらないんだと思う」

「まあそう焦るな母さん。式まで

は後1時間ある」

「そうですけど…」

私は少しも気にしていなかった。

仕事の忙しい彼は付き合っている時もデートに遅れることなんて普通だったし…

「じゃあ父さんと母さんは受付の

ほうに行っているよ」

「わかった」

私は一人になると、緩やかな睡魔が、私の頭に忍び寄ってきた。昨

ピーポーピーポーピーポー

「30代男性 脈拍51心拍43

血圧：頭部に大きな損傷が…」

「健！健！」

「…」

「お願い…お願いだから死なないで…」

「し…」

「しゃべらないで！」

「し…しあわ…せに…なれよ…」

12年後

あの時、歩くはずだったヴァージンロードを私は今…歩き出す

標識

ぼくは道に迷っている

ここには標識なんていうものはない

ただ、長い道があるだけだ

その先には何十本もの分かれ道がひかれている

選んだ後にも何十本もの分かれ道がひかれている

繰り返し自分で道を決めなければならない

まだ幼い頃、道には標識があつた

その標識に従えば痛い思いはしなかった

たまに標識を無視したり蹴り飛ばしたりしたこともあつた

でも、それはたんなる気まぐれだ

時が過ぎることにその標識を僕は失っていった

かわりに分かれ道が増えていった

今まで見たことも無い道だつてあつた

けれど、もう標識はない

先の見えない道へ踏み出すことに迷いが付きまとう

今まで他人に判断を任せたツケだ

今に思う、あの標識はどこを指していたのだろうか

プラスチック・ロード

領主の館の三階、廊下。ここに一人息子ができた日以来、十五年間、頻繁に訪れていた彼女にとっては、通い慣れた道のりだ。あの日から今までに、いつの間にかここは随分と変わってしまったて、美しかった庭園は雑草だらけになり、笑顔の溢れていた大広間には埃が積もっていた。その間に少しも変わらなかったものといえば、彼女が出向いた理由である、この館の一人息子——両親とも先日亡くなったので、今はこの館の主——くらいのものであった。

「……こんにちは、ドクター。待っていたよ」

彼女がいつもの部屋の扉を開けると、主はベッドに横たわったまま穏やかに微笑んでいた。端正な青年の顔を直視できずに、無言で診断器具を取り出す。彼女ができるだけ時間をかけてそれを行う中で、彼は懐かしむように、そつと語り始めた。

「あのねドクター。あの日から今まで、僕の毎日はまるでプラスチックの道を進むようだったよ。行く先は決まっていて、ねじれることは無い。けれど足場は割れやすそうで、ゴールに辿り着く前にこの幸せが壊れてしまうのではないかと不安にもなった」その言い回しが前のこの館の主に似ていて、彼女は思わず目を伏せた。この館で過ごした十五年間は、確かに彼をこの家の息子にしたのだ。

「でも、プラスチックは案外強かった。足場は最後まで割れなかった。……父も母も、ドクターの予測より長生きしたのに、僕は親より先に逝く不孝者にならずにすんだ」

彼は小さく肩を揺らして笑った。プラスチックの焼ける匂いが微かに漂い、彼女の鼻を衝く。診断器具はもはや必要なかった。

「感性記憶回路に使われている超伝性プラスチックにね、熱回路が接してしまつたらしい。もう修復はできないだろう。……僕の回収、頼めるかな」

こんなときでも彼は笑っていた。笑顔を絶やさない、優しい性格。十五年前、彼女が入力したプログラムの通りだった。さすが、ロボットだ、と、思った。

「ドクター、この家の息子として作ってくれて、ありがとう。幸せだった。僕だけじゃない、みんな、とっても幸せだったよ。だからまた、誰かを幸せにしてあげて？」

彼女は弱く微笑んだ。どんなに感謝の言葉を渡されても、自分も幸せだったとは告げられる気がしなかった。代わりに、最後まで、彼の前では科学者として振舞った。

「子宝に恵まれなかった領主ご夫妻に、ご子息を。ご子息とご両親に、幸せを。それぞれお渡しできたこと、科学者として、これほど嬉しいことはありません」

「……ああ、うそつき。それなら、どうして、なっているんだい、ドクター」

彼女はじっと、思考回路を一つ遮断することに閉じていく彼の瞳を見つめて、最後の一瞬、額に小さくさよならのキスをした。

「Good night, my plastic lord。」

自分の手で作り出した子が先に逝くのは、もう何度目になるかわからなかった。

手のひら

手のひらをぼんやりと眺めていたら
生命線が途中で二本の対称的な道のように分岐していることに気がついた

道　　る　　い　　て　　し　　ね　　ぐ　　ね　　ぐ　　て　　く　　ゝ　　が　　な　　も　　て　　と　　は　　本　　一　　も　　う

道　　な　　ぐ　　す　　つ　　ま　　て　　く　　短　　は　　本　　一

今までの道の分岐点に立っているのだから
私は今十八歳

地域再生プロジェクト

二〇一一年七月、ここの月影村では何か名所を作って、観光客を呼び込もうとしていた。かつて旅館街として栄えたこの村も、観光客が減少する中、平均年齢五十八歳、人口三百人という有様。予算も乏しく、もはや、村自体がいつ破産しても、おかしくない状況だった。そんなこの村に、自称、地域復興のスペシャリスト、「静寂な、くたびれた村ゼロ」のスローガンのもと活動する、通称「寂〇」氏がやってきた。

「村長、下渡（げど）村長、いい話がありますよ。」

「なんじゃあ、あんた、いかにも怪しそうな口調しおって、あんたに出す金なんざないわあ。国には散々金を騙し取られたしのお。なんだあ、『弱王』なんざ、んな変な名前つけるなんて、変態か！ウホッ、ゲホゲホ…」

「村長、そんな気持ち微塵もありませんよ。ボランティアみたいなものですよ。ただうまくいったら、その興行収入の四割もいただければいいですよ。村を変にいじくることもない。」

「じゃあ、あんた、そんなに自信があるなら、やってみなさい。こんな村に何の産業を興すんじやい。失敗したら、覚悟してもらおうぞい。」

「大丈夫、失敗はありませんよ。この村なら間違いなく名所になれます。費用もこちらで負担しますし。ただし、観光客には、声をかけないでくださいよ。あと、ある一人には協力してもらいます。その人は…」

村の人達も、半信半疑で納得して、寂〇氏に村の運命がゆだねられた。

一ヶ月後、信じられないことが起こった。次から次へと観光客が来ること。工事何もしていないのに、次々人がきて、興奮して旅館街の写真を撮っていくのだ。そして、村の写真屋で現像して、誰もが旅館に泊まり、中には、何日も泊まる人もいた。さびれた旅館は予約でいっぱいになり、もう濡れ手に粟の状態であった。

「いやあ、こんなことになるなんて、あんたは魔法使いなんかかい？」

「だから言ったでしょう、村長。わたしのやり方に間違いはないと。そのうち、この村にも若者が住み着きますよ。あとはあなたたちの番です。それじゃ、頑張ってください。」

そう言って、寂〇氏は、旅館予約の収入見込み分を含め、興行収入の四割をもって、意気揚々と帰っていった、

しばらくして、とうとう村にも若者が住み着くようになってきた。そうした住民の一人に村長が声をかけた。

「いやあ、あんさん、なしてこんな寂れた村にきたんじやい。」

「それは、この村が好きだからに決まっているじゃないですか。」

「いやあ、そんなこといつてくれるなんて、かんむりよ…」

「見て下さいよ、この写真、テレビであの霊能力者の言っていた通り、ここゴーストロードにはたくさん霊がいるんですね。あの写真屋で現像したら、ホラ！」

村長があわてて写真を手にとると、たしかに、何か人の顔らしきものが映っていた。

「なんでも、この自分の守護霊らしいですね。しかも、旅館の写真は、座敷童子の親戚の霊も写って、見えたら村にいるほど自分に福が訪れるって。いやあ、半信半疑でしたけど、うれし…あれ、村長、どうしたのですか？」

「き、君、その番組、い、いい、一体何時からやってたんじや？」

「えっと…新聞が…あ、あった。この番組です。毎週ここの特集組んで、視聴率ウハウハって噂ですよ。」

「そっか…みんな黄門様みていたから、知らなかったのじやな…。あの男、本当はでいれく…ふが…。」

もうしばらくふさがりそうにない村長の口から、入れ歯が音をたてて落っこちた。

荷下ろし

ネットから手に入れたファイルを保存し開いた。知らない音が流れ始めた。

解凍ファイル：Xの唄

提供者：芸術家A

このファイルをダウンロードしてしまったあなたは、呪われます。

お金を払わないで作品を手に入れようとした、あなたがいけないのです。

私も以前はアーティストでした。私の歌は結構話題にはなったんですよ。

でも、CDは売れませんでした。皆さんが、インターネットで音楽を違法に手に入れてしまうからです。

こういうの信じる信じない関係なく、必ず悪いことが起きます。明日かもしれません、あるいはもっと先。でも確実にあなたは、大事な何をなくすでしょう。

でも、落ち込まないでください。

あなたが悲しまないで済む方法が一つあります。

このファイルをどこかの売れてる歌とでも称して、無料ダウンロードサイトに最低十回紛れ込ませてください。

私が、熱望するのはこれから羽ばたこうとするアーティスト達が私と同じ思いをしないで済む世界の実現です。みなさんがこのファイルをみて違法に音楽を手に入れることをやめれば、私の夢は実現します。私の夢が実現したら私はもうあなたを呪いません。

ダウンロードのダウン(down)は下ろす、ロード(load)には重荷という意味があります。いろんな人にこのファイルをダウンロードさせることで、つまりあなたの不幸は減っていく、あなたの荷が下りていく仕組みです。

これをダウンロードしたあなたは誰かの荷をおろしてあげたってことなんですよ。ね、面白いでしょ。

俺は、そこでパソコンを閉じた。

早く荷を下ろしたい。その気持ちでいっぱいだった。

コンテスト結果

[Aの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
A01	ロード/道路 (まさに翻訳)	15 pt	2 位	0 sp
		おー、うまいこと言った！感が炸裂する表紙でした。 「翻」一文字に賭けた潔さがここちよいですね。 そして、Bの表紙さんとお揃いなところが今週のポイントでした。 「スゴイ」「よく気付いた」と感動の嵐を巻き起こしてのシルバー・メダルです、おめでとう!!		
A02	「道」	11 pt	3 位	2 sp
		主張を文字に託したアイディアがいい。話の運びもていねいで好感を持てます。 ただ何かを主張するには、少しばかりのリサーチが必要で、そこをきっちり固めたかった。 常識なんかに従わないぞのひねくれ上等路線、ブロンズメダルで祝福です。おめでとう！ 特別賞：マイケル・ジャクソンで賞（A-2のディスカッション中に死を知ったから。歴史に残る人がまた1人消えた、アーメン）目のつけどころがいいで賞 イチオシフレーズ：「曲がりくねっているからこそ人間性が溢れ出す」「スーパー大辞林3.0」		
A03	私の人生	3 pt	8 位	2 sp
		「迷った」のあとに敢えて何を選択したかを書かずに結果だけ載せるというつくりが、謎解きの想像力を刺激して、おもしろかったです。 特別賞で買えばコールの後押しをいただいたカピバラさんの運命やいかに？ 特別賞：カピバラ賞（買ってしまえばいいじゃない） 買ってあげま賞（カピバラさん高いから買ったら後悔するので買いましょう）		
A04	ロード・ショー	3 pt	8 位	4 sp
		地上の喧噪vs天上の静謐。同時並行で見せることで、二つのドラマが味わえるのはおいしいです。 けれど、「一年に一日だけ」だからロマンティックなのに、てきとーに前後にずらせちゃうなんて、ちょっと夢がないかなあ、とそこだけ残念。 なにやらタイトルがヒットして、ロード賞3連発、おかげで最多特別賞です、おめでとう！ 特別賞：優秀コラム賞（とても良い作品だったから） ロード賞（まんま）ロード賞（ただの駄洒落です） ロード賞（なんかショーがよかったかも） イチオシフレーズ：「一日早い七夕の夜に。」		
		11 pt	3 位	2 sp
		なんと教会型コラム！ レイアウトがすてきで、かつ、なかみもがっつりという両方が備わっているところがすばらしかったです。 失われゆくから、よりいっそう、いとおしい。ニッポ		

A05	Virgin Road	ニア・ニッポンみたいなものではないかな。 叫ばせてくださいですか、そうですか。だいじょうぶ、誰も反論しなかったから。ブロンズメダルと俺の嫁、たいせつにお持ち帰りくださいませ。おめでとう！ 特別賞：サザエさん賞（レイアウトがサザエさんのエンディングにしか見えない） 5 類で賞（まじめに語っておきながら、最後のおとし方がいい） イチオシフレーズ：「二次元のバージンロード」「俺の嫁」（古賀渚）「バージンのままバージンロードを歩く花嫁はあまりいなくなった」「二次元」
A06	スポーツへの道	0 pt12 位0 sp おやおや、そんなオチで、ロードの二度使いワザですか。そこに工夫を読みました。 実話かなあと、いろんな失敗談が苦笑を誘います。友だちトークの親近感がいいね。 イチオシフレーズ：「しかも、臭い・・・」
A07	終点	8 pt5 位0 sp いいなあ、この気さくな神様。そのキャラクターが何よりの魅力でした。 ときに、コンセプトは終点すなわち始点、人生は輪廻転生、という理解でよろしいのでしょうか。いまいち自信が持てませんが、たぶんそうですね。 イチオシフレーズ：「【終】」
A08	無題（間違ってたっていい）	3 pt8 位0 sp 宣言しちゃえば勝ち!? ばしっと決意あふれる潔さでした。
A09	無題（神様といっしょ）	20 pt1 位0 sp 神様に背負われて。 なかなか心たのしい設定です。 ときにはストーカーで、ときには背負い人。何だかバチアタリなほど、献身的な守護霊神様がいつも一緒なら、そう、人生も悪くないね♪ あたたかな人生観がフロアにヒットして、みごとゴールド・メダルです、おめでとう!!! 高校の恩師さんにご報告ください。 イチオシフレーズ：「私があなたを背負って歩いてきたからです」
A10	思い出のロード	1 pt11 位0 sp タイトル、たぶんダブルミーニングかな。 思い出の道/思い出をロード（読み込み中）。 小中高と経て、まだまだこれからの人生だけど、こんなふうにしっとり振り返れる道があるって、いいですね。
A11	目を閉じて	7 pt7 位0 sp ふらふらしないぞ決意表明。 エピソードとともに実感こもって響いてきます。 お化け道のお話が、実体験かなあと思わせるリアリティでした。
		8 pt5 位5 sp 明日は明日の風が吹く。

A12	長い道のり	とても前向きな、今週の「おやすみなさい」でした。 大レポ気分みんなの気持ちをゲットして、さらいましたよ、今週のイチオシフレーズ大賞！おめでとう！ 特別賞：もう寝ま賞（短いのに共感できる。全体のシメとしてオチている）早く寝ま賞（コラム、夜中までがんばってたっしょ？笑）そんなわ——賞（ねむい）諦めも肝心で賞（物理実験の大レポですか？） 大レポおつかれ賞（大レポで疲れただろうから） イチオシフレーズ：「光は長い」（に読める）「そんなわけでもう寝ます」×5
-----	-------	--

[Bの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数 まじょコメント	順位	特別賞
B01	ロード/道路 （回文）	Aとお揃いの今週の表紙。 グローバル回文の趣向にて、さっくりスタートです。 特別賞：グローバル賞（グローバルだから）	0 pt11 位	1 sp
B02	分かれ道	食事、という、ひとりであることのさびしさがいちばん身にしみるシーンを選んだ狙いが効いてます。 卵はサービスのひとことが、しみじみリアルだなあ。 特別賞：ハヌマーン賞（出会いはいつか別れとなる……だけど別れはきっと新しい出会いのきっかけだよ）惜しいで賞（もう少し構成を！）	2 pt9 位	2 sp
B03	騎士と吸血鬼	ダンピールのそんな設定。こまやかに作り込んでいただきました。 宿命を背負いつつハンター業に邁進する「私」がすてきにカッコいい。戦闘シーンもスピード感GOOD。 ただ、やはり長すぎかな。いっそ処刑シーンで、きれぎれのフラッシュバックという仕立てにしてみたら、文字数も削れて、より哀しさも際立つのでは。 特別賞：中二で賞（はあと） イチオシフレーズ：「そう彼がただの人間だったならば」（中二病的な感じ）「イエス、マイロード」×2	7 pt5 位	1 sp
B04	青春ロード	ぽつりぽつりとつぶやくようなレイアウトが内容にマッチしてます。 で、歌舞伎町は何だったんだろう？ 気になります。 そうそう、「自身」→「自信」は、とても間違えやすいワードなのでみなさま要注意。 イチオシフレーズ：「自身」	3 pt7 位	0 sp
B05	葦	哲学問答、秀才青年vs無知鴉篇。 どの部分も深い洞察につながっていきそうで、だから焦点がボケてしまった感。 言語学がニガテというあたりから主題で、人間の不条理をどう条理立てるかが大命題かな、と読んだのですが、さて？ 特別賞：倫理で受験したで賞？（パスカル？） イチオシフレーズ：「栄養価が高いがまずい」「そんなこと言う鴉はお前ぐらいだ」	4 pt6 位	1 sp
		蛙蛙蛙。ぎょえええ。 すごい光景。これでもかっ！のグロさ。	25 pt1 位	5 sp

B06	ストロングウーマン	でも、ぜったいゴールが待ってるよ、と信じられる 「私」のタフさを光明として、一緒に一気呵成に走り抜けられます。 大ヒットでしたね。ロボットとの接戦を制しての首位です。ついでに最多特別賞もどうぞ。これでぶじにプレゼン場所までたどり着けますように。 おめでとう!!! 特別賞：やくどうかんで賞（はやい） キモイで賞（生理的嫌悪を覚える） シュールで賞（すごくシュール） オチがないで賞（まじでオチがない!!） 逆フロッガー賞（フロッガートークで盛り上がったから） イチオシフレーズ：「キュルルルル。」 「ビチビチ」 「それでも負けない.絶対に負けない」			
B07	無題（ピーポーピーポー）	<table><tr><td>3 pt</td><td>7 位</td><td>0 sp</td></tr></table> ストーリー物にタイトル無しは、不似合いです。付けてあげてくださいな。 で、ラスト、どうなったんだろ？ 解釈その1 別の彼と 解釈その2 健ちゃん植物人間から生還！ その2であってほしいなあと思わせる、彼一直線のラブストーリーでした。 なんだかピーポーがヒットして、今週のイチオシフレーズ大賞です、おめでとう！ イチオシフレーズ：「ピーポーピーポーピーポー」×2 「12年後」（←1、2年後と読みたらしい）「し…しあわ…せに…なれよ…」	3 pt	7 位	0 sp
3 pt	7 位	0 sp			
B08	標識	<table><tr><td>11 pt</td><td>3 位</td><td>1 sp</td></tr></table> 進むごとに枝分かれする迷い道。 今回、たっくさんの書き手さんがこのモチーフで書いて来られました。大学選びという大きな選択をしたあとの、みなさま共通の実感なのでしょう。 迷子気分は自分だけじゃないんだ！です。 その実感を「標識」という比喻を持ち込んで、幼い頃と今を対比した工夫が良かったです。おめでとう王道ブロンズ・メダル！ 特別賞：王道で賞	11 pt	3 位	1 sp
11 pt	3 位	1 sp			
B09	プラスチック・ロード	<table><tr><td>23 pt</td><td>2 位</td><td>1 sp</td></tr></table> プラスチック。ロボット。カクカクの無機的なアイテムに〈情〉を持たせたことで、意表を衝いたおもしろみとなり、不思議に明るい悲しみを醸し出しています。 死を看取る者/思いを遺しつつ逝く者。ありがちの男と女というような、なまなましい設定にできなかったことで、よりピュアにその交情が際立ち、しんと余情に浸れます。 またしてもすてきな物語をありがとう！シルバー・メダルをどうぞ。 特別賞：みやぶられた賞（残念でした） イチオシフレーズ：「Good night,my plastic lord」	23 pt	2 位	1 sp
23 pt	2 位	1 sp			
B10	手のひら	<table><tr><td>0 pt</td><td>11 位</td><td>0 sp</td></tr></table> 生命線？思わずじっと手を見ちゃったり。 そんな親近感が題材選びのセンスの良さでした。 ちょっとレイアウトにがんばりすぎて、読みにくさが犠牲になったのが残念。	0 pt	11 位	0 sp
0 pt	11 位	0 sp			
		<table><tr><td>2 pt</td><td>9 位</td><td>1 sp</td></tr></table> これって詐欺？ペテン？ ——いえいえいえいえ、だあれも損はしていません。	2 pt	9 位	1 sp
2 pt	9 位	1 sp			

B11	地域再生プロジェクト	村、よろこぶ。新住民、よろこぶ。テレビ局、よろこぶ。ほおら、ね？ みごとな構成力でした。 どうか末永く、バレませんようにっ！ 特別賞：ゲド戦記で賞 イチオシフレーズ：「座敷童子の親戚の霊」
B12	荷下ろし	10 pt4 位2 sp 単なるチェーンメールのコワさではなくて、他人に転嫁すれば、そのぶん自分の不幸が減るっていうコンセプトが、じつに人の性（さが）に的確で、それをこう具象化してみせた手腕にうなりました。グレート！ 特別賞：やめま賞（やめようと思った） ニート賞（金出して買えよ）